

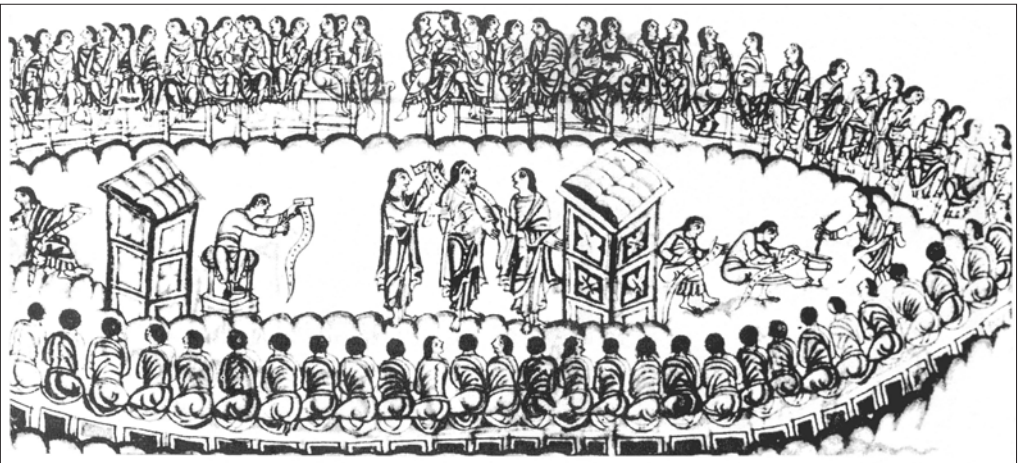
日本中世英語英文学会 第32回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2016年12月10日(土)・11日(日)

所：関西大学（千里山キャンパス）

The 32nd Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
10-11 December 2016
Kansai University (Senriyama Campus)



日本中世英語英文学会

目 次

会長挨拶	3
会場案内	4
最寄駅までのアクセス	5
最寄駅から会場までのアクセス	6
会場見取り図	7
プログラム 第1日 12月10日(土)	9
第2日 12月11日(日)	11
Programme Saturday 10 December	12
Sunday 11 December	14
発表要旨 第1日 12月10日(土) シンポジウム	15
招待発表	18
研究発表Ⅰ	18
研究発表Ⅱ	20
第2日 12月11日(日) 企画シンポジウム	22
研究発表Ⅲ	24

11月21日(月) [必着] までに、学会 HP 経由 (推奨)、
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

* 出張証明書が必要な方は、その旨をご記入下さい。

大会準備委員

白井菜穂子 (委員長) 三浦あゆみ (副委員長) 平山直樹
堀口和久 和治元義博 狩野晃一 福田一貴

開催校委員

和田葉子 (委員長) 尾崎久男 谷明信

事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
慶應義塾大学文学部 徳永聡子研究室内
Tel. 045-566-1195

会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候、会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。すでにご案内のとおり、日本中世英語英文学会第32回全国大会を、来る12月10日、11日（土、日）の両日、関西大学千里山キャンパスにて開催する運びとなりました。ここに大会のプログラムをお送りし、会員の皆様のふるってのご参加をお願い申し上げます。

本年度の大会は、数多くの研究発表に加えて、英語のものを含む複数のシンポジウムや招待発表も予定されており、両日ともにとても充実した内容となっています。そのようなプログラムの実現に向けてご尽力いただいた大会準備委員会に感謝いたします。それでは、一人でも多くの会員の皆様にお目にかかれますことを楽しみにしております。

2016年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長 松田 隆美

会 場 案 内

1. 受付は、12月10日(土) 11:30-16:00および11日(日) 9:30-11:30に、100周年記念会館2階ロビーで行います。
2. 当日会員会費は、一般1,000円、学生・定年退職者500円です。
3. ハンドアウトは、各発表会場で配布します。
4. 大会本部は、100周年記念会館2階第1会議室です。
5. 会員控室は、100周年記念会館2階第3会議室です。
6. 司会者・発表者控室は、100周年記念会館2階第6会議室です。
7. 書店展示は、100周年記念会館2階展示ロビーで行われます。
8. ポスターセッションは、12月10日(土) 12:00-13:00および11日(日) 9:00-10:00に、100周年記念会館2階ホール2で行います。
9. 懇親会は、12月10日(土)18:00からレストラン「紫紺」(100周年記念会館3階)で行います。会費(一般5,000円、学生2,000円)は、当日受付でお支払い下さい。
10. 車による会場への入場はできません。また、100周年記念会館内は全面禁煙です。
11. 学内の食堂は、日曜日に営業していませんが、阪急関大前駅の北口から正門に続く通りには食事のできる店があります。
12. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

連 絡 先

関西大学(千里山キャンパス)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

(大会本部:100周年記念会館2階第1会議室)

開催校連絡先:和田葉子研究室 06-6368-0656

最寄駅までのアクセス



■ 大阪（梅田）からのアクセス

阪急電鉄「梅田」駅から、千里線「北千里」行で「関大前」駅下車（この間約20分）、徒歩約5分。または京都「河原町」行（通勤特急を除く）で「淡路」駅下車、「北千里」行に乗り換えて「関大前」駅下車。

■ 京都（河原町）からのアクセス

阪急電鉄「梅田」行で「淡路」駅下車、「北千里」行に乗り換えて「関大前」駅下車、徒歩約5分。

■ 地下鉄利用のアクセス

地下鉄堺筋線（阪急電鉄千里線に相互乗り入れ）が阪急電鉄「淡路」駅を経て「関大前」駅に直通しています。

■ JR京都線（東海道本線）利用のアクセス

JR「吹田」駅下車の後、阪急バス「JR吹田北口」停留所から「関西大学」停留所下車（この間約7分・25分間隔で運行）、徒歩約7分。

■ 新幹線「新大阪」駅からのアクセス

○地下鉄および阪急電鉄利用の場合

JR「新大阪」駅から地下鉄御堂筋線「なかもず」行で「西中島南方」駅下車、阪急電鉄に乗り換えて「南方（みなみかた）」駅から「淡路」駅を経て「関大前」駅下車（この間約30分）、徒歩約5分。

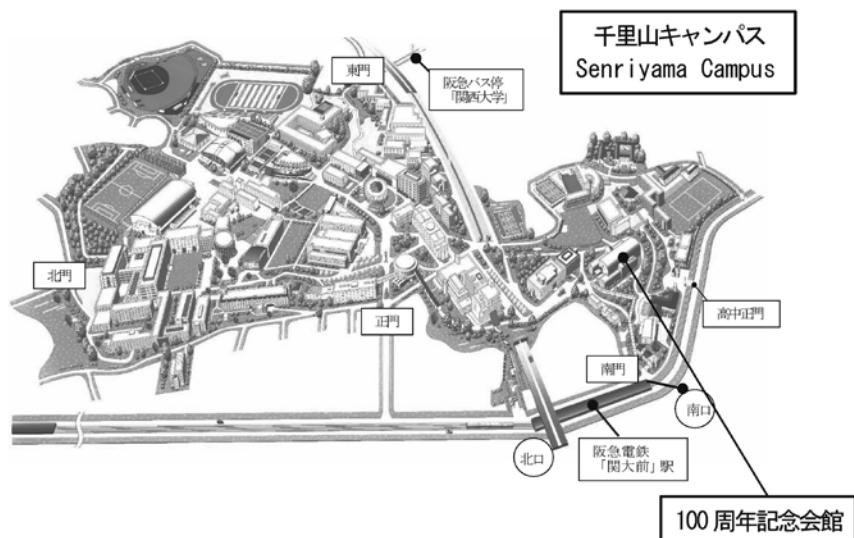
○JR利用の場合

JR「新大阪」駅から、JR京都線（東海道本線）「京都」方面行（快速・新快速を除く）で「吹田」駅下車（この間約5分）の後、阪急バス「JR吹田北口」停留所から「関西大学」停留所下車（この間約7分・25分間隔で運行）、徒歩約7分。

■ 大阪（伊丹）空港からのアクセス

大阪モノレール「大阪空港」駅から「門真市（かどまし）」行で「山田」駅下車、阪急電鉄に乗り換えて「関大前」駅下車（この間約30分）、徒歩約5分。

最寄駅から会場までのアクセス

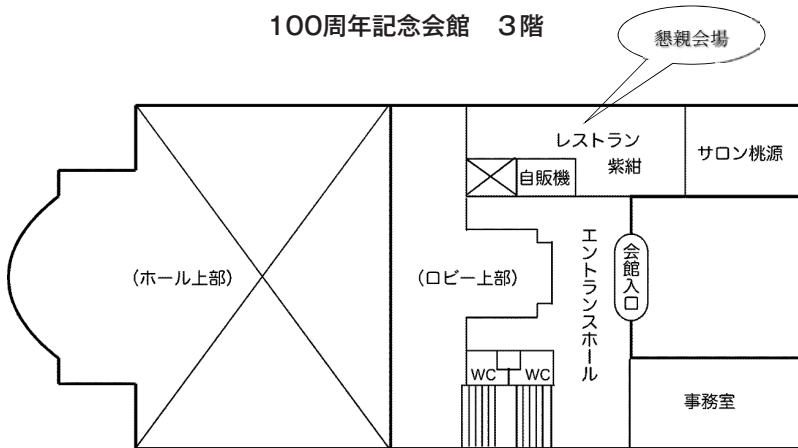


- ・ 阪急電鉄「関大前」駅南口から徒歩約5分
- ・ 阪急バス「関西大学」停留所から徒歩約7分

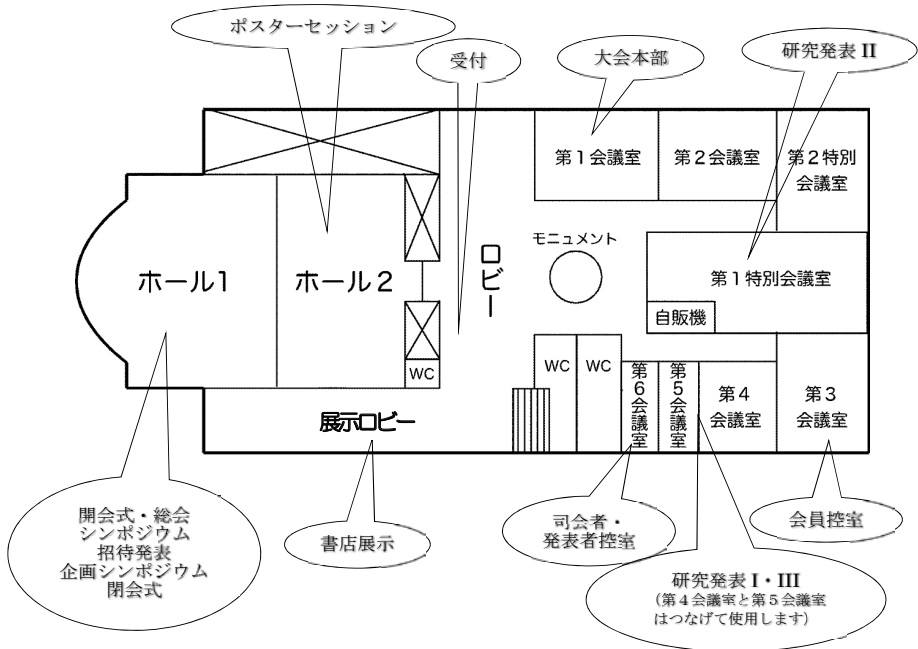
★100周年記念会館の正面入り口が3階になるので、大会会場（2階）へは会館に入ってから階段を下りてください。

会場見取り図

100周年記念会館 3階



100周年記念会館 2階



ホール 1	開会式・総会・シンポジウム・招待発表 企画シンポジウム・閉会式
ホール 2	ポスターセッション
第 4, 5 会議室	研究発表 I・III
第 1 特別会議室	研究発表 II・編集委員会・評議員会・東支部幹事会
第 3 会議室	会員控室
第 6 会議室	司会者・発表者控室
第 1 会議室	大会本部・大会準備委員会控室
第 2 会議室	開催校準備委員控室
展示ロビー	書店展示
ロビー	受付

日本中世英語英文学会 第32回全国大会プログラム

2016年12月10日(土)・11日(日)

関西大学(千里山キャンパス)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

(大会本部:100周年記念会館2階第1会議室)

開催校連絡先:和田葉子研究室 06-6368-0656

第1日 12月10日(土)

11:30-16:00 受付(100周年記念会館2階ロビー)

* 会員控室(100周年記念会館2階第3会議室)

12:00-13:00 ポスターセッション(100周年記念会館2階ホール2)

13:00-13:45 開会式・総会(100周年記念会館2階ホール1)

司会 山本伍紀(慶應義塾大学非常勤講師)

開会の言葉

会長 松田隆美(慶應義塾大学)

開催校挨拶

関西大学学長 芝井敬司

議事

事務局報告

事務局長 徳永聡子(慶應義塾大学)

編集委員会報告

編集委員長 伊藤盡(信州大学)

大会準備委員会報告

大会準備委員長 白井菜穂子(文化学園大学)

大会案内

開催校委員 和田葉子(関西大学)

14:00-16:30 シンポジウム(100周年記念会館2階ホール1)

Sermons and Biblical Narratives Pre- and Post-Arundel

司会 田口まゆみ(大阪産業大学)

I. Introduction to Archbishop Arundel and his Constitutions

James H. Morey(エモリー大学)

II. The Bible in the Changing Landscape of Late Medieval English Sermons

赤江雄一(慶應義塾大学)

III. Biblical Translations in the *Historye of the Patriarks* and Caxton's
Golden Legend

田口まゆみ(大阪産業大学)

IV. From Verse to Prose Pre- and Post-Arundel

James H. Morey (エモリー大学)

16:40-17:20 招待発表 (100周年記念会館 2階ホール 1)

司会 小倉美知子 (東京女子大学)

Gerald of Wales: A Man of Five Languages

Patrick P. O'Neill (ノース・カロライナ大学チャペルヒル校)

14:00-16:20 研究発表 I (100周年記念会館 2階第 4, 5 会議室)

14:00-14:40 司会 杉藤久志 (日本大学)

1. 「誤読」される政治的身体

— John Lydgate の *The Siege of Thebes* における雄弁術の暴力性と
解釈不可能性

新居達也 (慶應義塾大学大学院)

14:50-15:30 司会 今井光規 (摂南大学名誉教授)

2. 改宗の不在と他者の受容—中英語ロマンス *Floris and Blancheflour* を中心に
趙泰昊 (駒澤大学非常勤講師)

15:40-16:20 司会 笹本長敬 (元大阪商業大学教授)

3. プルーデンスは賢妻か？

野地薫 (関東学院大学非常勤講師)

14:00-16:20 研究発表 II (100周年記念会館 2階第 1 特別会議室)

14:00-14:40 司会 秋篠憲一 (同志社大学)

4. ガウェインと聖杯—『アーサー王の死』における信仰と反抗

長谷川千春 (大東文化大学)

14:50-15:30 司会 秋篠憲一 (同志社大学)

5. カズオ・イシグロの中世アーサー王物語

— *The Buried Giant* における *Sir Gawain and the Green Knight* の影響

岡本広毅 (立命館大学)

15:40-16:20 司会 多ヶ谷有子（関東学院大学）

6. *The Vision of Tundale* における至高天の三位一体について
壬生正博（福岡歯科大学）

18:00-20:00 懇親会（100周年記念会館 3 階 レストラン「紫紺」）

第2日 12月11日(日)

9:00-10:00 ポスターセッション（100周年記念会館 2 階ホール 2）

9:30-11:30 受付（100周年記念会館 2 階ロビー）

* 会員控室（100周年記念会館 2 階第 3 会議室）

10:00-13:00 企画シンポジウム（100周年記念会館 2 階ホール 1）

チョーサーと多文化共生

司会 地村彰之（岡山理科大学）

- I. 多言語主義社会に生きた複言語主義者チョーサーの言語ナショナリズム
海老久人（神戸女子大学）

- II. 中英語韻文ロマンスにおける多言語的要素

西村秀夫（三重大学）

- III. 『トロイラスとクリセイデ』における<境界>の身体化

ー チョーサーの話法とポリフォニー

中尾佳行（福山大学）

- IV. 「船乗りの話」に見られる商人像のチョーサーと読者にとっての重要性

工藤義信（金沢学院大学）

10:00-11:30 研究発表Ⅲ（100周年記念会館 2 階第 4, 5 会議室）

10:00-10:40 司会 高橋勇（慶應義塾大学）

7. 中世主義者 W. G. Collingwood の中世カンブリア再建小説の言語学的再分析
伊藤盡（信州大学）

10:50-11:30 司会 寺澤盾（東京大学）

8. 中英語脚韻詩における定型表現ー頭韻詩との比較から
守屋靖代（国際基督教大学）

13:10-13:25 閉会式（100周年記念会館 2 階ホール 1）

閉会の言葉

副会長 地村彰之（岡山理科大学）

PROGRAMME

SATURDAY 10 DECEMBER

11:30–16:00 Registration (Lobby, 2F Centenary Memorial Hall)

*Members' Tea Room (Meeting Room #3, 2F Centenary Memorial Hall)

12:00–13:00 Poster Session (Hall #2, 2F Centenary Memorial Hall)

13:00–13:45 Plenary Session (Hall #1, 2F Centenary Memorial Hall)

Presider: YAMAMOTO, Tomonori, *Keio University*

Opening Address

MATSUDA, Takami

President of JSMES, *Keio University*

Welcome Address

SHIBAI, Keiji

President, *Kansai University*

Business Announcements

14:00–16:30 Symposium (Hall #1, 2F Centenary Memorial Hall)

Sermons and Biblical Narratives Pre- and Post-Arundel

Presider: TAGUCHI, Mayumi, *Osaka Sangyo University*

I. Introduction to Archbishop Arundel and his Constitutions

MOREY, James H., *Emory University*

II. The Bible in the Changing Landscape of Late Medieval English Sermons

AKAE, Yuichi, *Keio University*

III. Biblical Translations in the *Historye of the Patriarks* and Caxton's
Golden Legend

TAGUCHI, Mayumi, *Osaka Sangyo University*

IV. From Verse to Prose Pre- and Post-Arundel

MOREY, James H., *Emory University*

16:40–17:20 Invited Lecture (Hall #1, 2F Centenary Memorial Hall)

Presider: OGURA, Michiko, *Tokyo Woman's Christian University*

Gerald of Wales: A Man of Five Languages

O'NEILL, Patrick P., *The University of North Carolina at Chapel Hill*

14:00–16:20 Paper Session I (Meeting Room #4, 5, 2F Centenary Memorial Hall)

14:00–14:40 Presider: SUGITO, Hisashi, *Nihon University*

1. (Mis)reading and the Body Politic: Violent Eloquence and Uninterpretability in John Lydgate's *Siege of Thebes*

NII, Tatsuya, *Graduate Student, Keio University*

14:50–15:30 Presider: IMAI, Mitsunori, *Professor Emeritus, Setsunan University*

2. The Absence of Conversion and the Acceptance of Saracens in the Middle English *Floris and Blancheflour*

JO, Thae-Ho, *Komazawa University*

15:40–16:20 Presider: SASAMOTO, Hisayuki, *Former Professor, Osaka University of Commerce*

3. Is Prudence a Wise Wife?

NOJI, Kaoru, *Kanto Gakuin University*

14:00–16:20 Paper Session II (Special Meeting Room #1, 2F Centenary Memorial Hall)

14:00–14:40 Presider: AKISHINO, Kenichi, *Doshisha University*

4. The Unrepentant Knight: Malory's Gawain and the Holy Grail

HASEGAWA, Chiharu, *Daito Bunka University*

14:50–15:30 Presider: AKISHINO, Kenichi, *Doshisha University*

5. Kazuo Ishiguro's Retelling of Arthurian Legend: *Sir Gawain and the Green Knight* as an Inspiration for *The Buried Giant*

OKAMOTO, Hiroki, *Ritsumeikan University*

15:40–16:20 Presider: TAGAYA, Yuko, *Kanto Gakuin University*

6. On the Holy Trinity of the Empyrean in *The Vision of Tundale*

MIBU, Masahiro, *Fukuoka Dental College*

18:00–20:00 Reception (Restaurant *Shikon*, 3F Centenary Memorial Hall)

SUNDAY 11 DECEMBER

9:00-10:00 Poster Session (Hall #2, 2F Centenary Memorial Hall)

9:30-11:30 Registration (Lobby, 2F Centenary Memorial Hall)

*Members' Tea Room (Meeting Room #3, 2F Centenary Memorial Hall)

10:00-13:00 Special Symposium (Hall #1, 2F Centenary Memorial Hall)

Chaucer and Cultural Symbioses

Presider: JIMURA, Akiyuki, *Okayama University of Science*

I. Chaucer and English Nationalism in Multilingualism

EBI, Hisato, *Kobe Women's University*

II. Multilingual Elements in Middle English Romances

NISHIMURA, Hideo, *Mie University*

III. Embodied "Boundaries" in *Troilus and Criseyde*: Polyphony in Chaucer's Speech/Thought Presentation

NAKAO, Yoshiyuki, *Fukuyama University*

IV. The Significance of the Image of the Merchant in the *Shipman's Tale* for Chaucer and his Primary Audience

KUDO, Yoshinobu, *Kanazawa Gakuin University*

10:00-11:30 Paper Session III (Meeting Room #4, 5, 2F Centenary Memorial Hall)

10:00-10:40 Presider: TAKAHASHI, Isamu, *Keio University*

7. Linguistic Re-analyses of Re-constructed Medieval Cumbria in W. G. Collingwood's Novels of Medievalism

ITO, Tsukusu, *Shinshu University*

10:50-11:30 Presider: TERASAWA, Jun, *The University of Tokyo*

8. Formulaic Expressions in Middle English Rhymed Verse in Contrast to Alliterative Verse

MORIYA, Yasuyo, *International Christian University*

13:10-13:25 Closing Address (Hall #1, 2F Centenary Memorial Hall)

JIMURA, Akiyuki, Vice-President of JSMES, *Okayama University of Science*

発表要旨

第1日 12月10日(土)

14:00-16:30 シンポジウム (100周年記念会館2階ホール1)

Sermons and Biblical Narratives Pre- and Post-Arundel

司会 田口まゆみ (大阪産業大学)

Discussing English spirituality from the late fourteenth century through the early sixteenth, Michael Sargent underlines ‘its remarkable complexity and diversity, not “headed” anywhere in particular, with various voices in contention for control of the field of discourse, but with the outcome, at that time, as it happened, undetermined’ (‘Censorship or Cultural Change?’, in *After Arundel*, ed. by Vincent Gillespie and Kantik Ghosh (Brepols, 2011), pp. 55-72, at p. 60). Efforts to suppress the rise of dissenting voices (specifically of Wycliffe’s followers) are most famously represented by Archbishop Thomas Arundel’s Oxford Constitutions of 1409, proscribing any use and new production of the Bible in the vernacular. The impact of the censorship, once rather overemphasized under the influence of Nicholas Watson’s seminal essay ‘Censorship and Cultural Change in Late-Medieval England: Vernacular Theology, the Oxford Translation Debate, and Arundel’s Constitutions of 1409’ (*Speculum*, 70 (1995), 822-64), has recently come to be understood not to have been so powerful: the complexity and diversity of the religious culture of the period, so to speak, resisted the control of the Church or the State.

This symposium aims to offer some additional vantage points through empirical studies focused on the use of the Bible in selected fourteenth- and fifteenth-century sermons and biblical narratives. Two studies, one on sermons and one on biblical narratives, will be introduced by a ten-minute introduction to the issue and concluded by a response and additional argument by James Morey, the author of *Book and Verse: A Guide to Middle English Biblical Literature* (Illinois Medieval Studies, 2000).

I. Introduction to Archbishop Arundel and his Constitutions

James H. Morey (エモリー大学)

Prior to detailed and specific discussions presented by three papers, a brief introduction to Archbishop Arundel and his Constitutions will be given.

II. The Bible in the Changing Landscape of Late Medieval English Sermons

赤江雄一 (慶應義塾大学)

The use of biblical texts in the context of preaching raises many questions which are inter-related in complex ways. How much is it true that sermons were a locus of biblical exegesis in the first place? In cases where it is true, what were considered the proper methods? Since many sermons written in Latin in this period were composed with their delivery in the vernacular in mind, one needs to ask how preachers crossed the gaps between the written text and oral delivery, and between Latin and the vernacular, concerning the biblical text (as well as other types of text in a sermon). This paper first attempts to map out these major issues, and then to trace several lines of development from fourteenth-century “modern” sermons to Wycliffite sermons to different types of responses in fifteenth-century orthodox sermons towards the earlier styles. In doing so, three major points are given special focus: the key biblical sentence in a sermon called the *thema*, biblical verses as proof-texts, and exegeses based on translated biblical extracts. The paper concludes by evaluating the effect of the Arundel’s *Constitutiones* of 1409 on these developments.

III. Biblical Translations in the *Historye of the Patriarks* and Caxton’s *Golden Legend*

田口まゆみ (大阪産業大学)

This paper discusses the use of Bible in two late fifteenth-century biblical narratives, the *Historye of the Patriarks* (anonymous; end of the fifteenth century) and the Old Testament additions in Caxton’s *Golden Legend* (1483–84). They are both essentially literal translations of the Old Testament

stories – independent of the Wycliffite versions – integrated with other source materials. Most interestingly, their chief external source is Peter Comestor's *Historia scholastica*. Their indebtedness to this famous 'school book', and their similarity to the *Bible historiale*, which is a combination of a French translation of the *Historia scholastica* and the French Bible, are more conspicuous at the beginning. They further present influences of such popular metrical paraphrases of the Bible as the *Cursor mundi* and the *Bible of Macé de la charité*, one of the French translations of Peter Riga's *Aurora*. A close examination of the manner of compiling the sources reveals that the translators, or more properly the compilers, employed very complex methods in order to create their own versions. This study will illustrate how the sources are combined in the two texts. Finally, these texts and methods will be considered in relation to the proscription of vernacular Bibles in fifteenth-century England.

IV. From Verse to Prose Pre- and Post-Arundel

James H. Morey (エモリー大学)

There is a substantial corpus of Middle English literature that transmits the biblical narrative in both verse and prose from the fourteenth and fifteenth centuries. After a brief review of the various forms that biblical paraphrases took in narrative poems, prose compilations, and both verse and prose sermons I propose to examine two issues. First, whereas verse was the preferred mode of production in the fourteenth century (and earlier), prose became the more dominant mode in the fifteenth century. Second, there is the counter-intuitive fact that the majority of Middle English manuscripts dates from the fifteenth century, and post-date the Arundel ban on scriptural production. The Arundel ban may or may not have been decisive, but it marks a turning point from verse to prose and it coincides with increased manuscript production. I argue that these two phenomena are related, and that the Lollards were only partially responsible for these shifts. In order to make this case, sets of verse and prose biblical narratives and verse and prose sermons from each century will be compared.

16:40-17:20 招待発表 (100周年記念会館 2 階ホール 1)

司会 小倉美知子 (東京女子大学)

Gerald of Wales: A Man of Five Languages

Patrick P. O'Neill (ノース・カロライナ大学チャペルヒル校)

Gerald of Wales was one of the most famous and prolific Cambro-Norman writers of the twelfth century. It is a measure of his productivity that his works fill eight volumes of the Rolls Series. Of these the most widely read (then and now), are two works on Ireland (the *Expugnatio Hibernica* and the *Topographia Hiberniae*) and one on Wales (the *Descriptio Kambriae*). Even the most casual reader of these works in Latin will surely notice how frequently Gerald digresses to comment on vernacular personal names, place-names and other words in Irish, Welsh and English. Beyond that he quite often engages in what modern Indo-European scholars would call 'the comparative method', deploying his knowledge of Greek and Latin to make etymological comparisons between words from these latter two languages and their Celtic counterparts.

These activities reflect much more than mere linguistic curiosity or love of word play; rather, they provide insights into Gerald's thinking about the reality of linguistic differences in a kingdom that sought to enforce political unity. The paper will also address a second issue: to what extent (if at all) Gerald was influenced by contemporary linguistic theory as taught at Paris where he had studied on three different occasions.

14:00-16:20 研究発表 I (100周年記念会館 2 階第 4, 5 会議室)

14:00-14:40 司会 杉藤久志 (日本大学)

1. 「誤読」される政治的身体—John Lydgate の *The Siege of Thebes* における雄弁術の暴力性と解釈不可能性

新居達也 (慶應義塾大学大学院)

15世紀イングランドの詩人 John Lydgate による長篇叙事詩 *The Siege of Thebes* (c. 1420-23) は、テーベの建国から滅亡までの歴史を描き、批評においてはしばしば「君主の鑑」のジャンルに属する作品と目されてきた。殊に、暴力的な戦争への批判や争乱を避ける手段としての雄弁術の奨めがこの作品

の教訓として解釈され、そこには「暴力対雄弁術」という二項対立の構図が読み込まれている。例えば、テーベ初代の王 Amphiion は雄弁術によって暴力を用いずに国を築いたことで称賛される。しかし、この Amphiion の例をはじめ、Lydgate の描く雄弁術は常に詭弁や暴力へと陥る危険性も孕んでおり、必ずしも暴力と対置できるわけではない。本発表では、雄弁術に内在する道徳的な曖昧さと雄弁術に対する解釈の問題から「君主の鑑」としての *The Siege of Thebes* を分析することで、この作品でのテーベの政治的身体が解釈不可能な対象となって現れることを論じ、同時代の歴史的背景を踏まえたその意義を考察する。

14:50-15:30 司会 今井光規（摂南大学名誉教授）

2. 改宗の不在と他者の受容—中英語ロマンス *Floris and Blancheflour* を中心に

趙泰昊（駒澤大学非常勤講師）

サラセンの王子とキリスト教徒の恋を主題とした中英語ロマンス *Floris and Blancheflour* は「排除されるべき他者」としての異教徒とは対極のサラセン像を描きだしており、Dorothee Metlitzki が指摘するように、この物語は往々にして、異なる宗教間の融和を描いた牧歌的な作品として理解されてきた。

しかし、古仏語版において二つの宗教が明確に区別されている一方で、John A. Geck が指摘するように、現存する4点の中英語版においてはその区分は極めて曖昧なものになっている。

本発表は、現存する中英語版と古仏語版の比較を出発点に、中英語版に共通してみられる複数のサラセン的なモチーフを検証し、それぞれの要素が「宗教の違いを前提としながら、その両者の交流を促すものである」という可能性を指摘する。また、類似した要素を持つ *Bevis of Hampton* などの中英語ロマンスや「マンデヴィルの旅行記」との比較を論の補強としながら、後期中世の英語作品におけるサラセンに対する一つの態度を明らかにする。

15:40-16:20 司会 笹本長敬（元大阪商業大学教授）

3. プルーデンスは賢妻か？

野地薫（関東学院大学非常勤講師）

『カンタベリー物語』の中で、チャーサー自身が巡礼者の一人として語った「メリベウスの話」に登場するプルーデンスは、その名の通り思慮分別のある賢い

妻として描かれている。彼女は、留守中に自宅に押し入り、自分と娘を襲って娘に瀕死の重傷を負わせた敵に対する復讐に逸る夫メリベウスをたしなめ、怒りを鎮めて、敵を許すというキリスト教的見解に教え導こうとする。彼女は常に慎重かつ冷静に夫の言動を論破し、非の打ちどころがないほど完璧な論理によって夫を説得しようとする。「女は邪悪な存在だから、女の忠告には従わない」と豪語する夫を忍耐強く教え諭すブルーデンスは、まさに賢妻の鑑であるように見える。とはいえ、夫の間違った行動を逐一正していくやり方は、妻の悪口をあげつらう夫を激しくなじるバースの女房の攻撃法と共通している。本発表ではブルーデンスをバースの女房の counterpart としてみた時に、いわゆる“wicked wife”のパロディーとして賢妻ブルーデンスを描いたチョーサーの意図を明らかにする。

14:00-16:20 研究発表Ⅱ（100周年記念会館2階第1特別会議室）

14:00-14:40 司会 秋篠憲一（同志社大学）

4. ガウェインと聖杯—『アーサー王の死』における信仰と反抗

長谷川千春（大東文化大学）

サー・トマス・マロリー『アーサー王の死』においてガウェインは、自らの興味で出立した聖杯探究の成功を、自ら遠ざけている。ガウェインは、聖杯探究の途中、とある隠者によって罪を告白するように説かれるがこれに従わず、反抗的な態度を見せる。この様子は、聖杯探求を成功するガラハド、パーシヴァル、ボース、また聖杯を部分的に見ることが許されるランスロットと比べると異質であり、ガウェインのキリスト教への信仰心が欠如している傍証となっている。本発表ではまず、『アーサー王の死』、特に「聖杯物語」における騎士とキリスト教への信仰心の関係を紐解くことから議論を始める。そして、騎士の道徳やキリスト教を説く隠者の説教を拒みながら聖杯探究を行うガウェインに着目し、彼の非宗教的な態度を考察する。

14:50-15:30 司会 秋篠憲一（同志社大学）

5. カズオ・イシグロの中世アーサー王物語—*The Buried Giant*における *Sir Gawain and the Green Knight* の影響

岡本広毅（立命館大学）

ブッカー賞作家カズオ・イシグロの *The Buried Giant*（『忘れられた巨人』, 2015）は, 14世紀末に書かれた中英語ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』（*Sir Gawain and the Green Knight*, 以下 *SGGK*）の一節に着想を得て創作された。古代ケルトの神話伝承に端を発し, 中世イングランドにおいて人気を博した円卓の騎士ガウェインの物語は, 作家が追求する＜イングリッシュネス＞の問題を深化させる上で格好の材源となったと考えられる。ファンタジーの衣を借りた歴史小説である本作は, 中世イングランドで書かれたガウェイン・ロマンス群が内包する歴史性を確かに踏襲している。特に, *SGGK*に見られるブリテン島の建国, 島内地域間の秩序維持と共生, 現実と虚構の類似性といったテーマや問題と深く関連しているように思われる。本発表では *The Buried Giant* におけるこうした *SGGK* の影響を鑑みながら, イシグロが *SGGK* より抽出したエッセンスを探り, 現代の創作から逆照射される中英語ロマンスの新たな側面を検討してみたい。

15:40-16:20 司会 多ヶ谷有子（関東学院大学）

6. *The Vision of Tundale* における至高天の三位一体について

壬生正博（福岡歯科大学）

本発表は, 異界研究の一考察として, 夢幻視物語（dream visions）が記す至高天に焦点をあてる。夢幻視物語は, 地獄, 煉獄, 天と地のパラダイス等を探訪する物語で, 12世紀頃に最盛期を迎える。天の描写は主に黙示文書の流れを汲み, *The Vision of Tundale* もこの史的背景を持つ。原典は12世紀のラテン語版 *Visio Tnugdali* であるが, 発表では15世紀の中英語翻訳版（Cotton Caligula A ii）の Mearns 編集による刊本（1985）を使用する。*Tundale* の至高天の中核を成す三位一体の描写を見ると, ラテン語版と中英語版では微妙な差異がある。その違いは自由発想による原典の翻訳とも推察できるが, 本発表では史的観点に立ち, 14世紀初頭に創作された Dante 作 *La Divina Commedia* を両者の間に置いて比較考察し, Cotton 版が記す至高天の三位一体について解釈の可能性を探りたい。

第2日 12月11日(日)

10:00-13:00 企画シンポジウム (100周年記念会館 2階ホール 1)

チャーサーと多文化共生

司会 地村彰之 (岡山理科大学)

異なる多様な文化には、多様な価値システムが存在している。それらが共存する場合、多文化が共生していると言える。つまり、異種のもが同一の次元に存在し、それぞれがアイデンティティを保つ。それが、現代社会が向かいつつあるかにみえる文化のグローバル化、一元化、画一化の傾向に対して必要とされているものと言えそうである。異なる価値観を示す人間の智慧が、相矛盾しながら共に存在することは、多様な価値が共存していると考えられる。

本シンポジウムでは、ジェフリー・チャーサーのことばと文学を共通項として各講師がそれぞれの専門分野から多文化共生について論じる。多言語主義社会に生きた複言語主義者チャーサー、チャーサーの英語に見られる多言語的・多元的特徴、言語の境界という視点から見たチャーサーの多元性、社会集団の多様化から見たチャーサーの多元的な人物描写などのトピックを順に取り上げる。

I. 多言語主義社会に生きた複言語主義者チャーサーの言語ナショナリズム

海老久人 (神戸女子大学)

中世後期のイングランド社会は未だ、ラテン語とフランス語が公用語としての地位を占め、英語が民衆語として三言語が共生する多言語主義 (multilingualism) 社会だった。そうした中で公人としてのチャーサー、詩人としてのチャーサーはラテン語、フランス語、イタリア語、そして英語を使用する複言語使用 (plurilingualism) の人でもあった。チャーサーの言語環境は複雑ではあったが、彼のアイデンティティはイングランド人であり、彼の言語アイデンティティは英語へと収斂していく。

1368年にスペインへ出かけるチャーサーに、ナヴァラ国王シャルルから発行されたフランス語「身柄保証書」(現代の旅券、ビザ) には「イングランド人ジェフロワ・ド・ショセル 'Geffroy de Chauserre escuier englois'」と記載された。「イングランド人」チャーサーは確実に英語という言語を“my English,

myn English”(from *Astrolabe*, ll. 51 and 64) として言語アイデンティティが確立していく。その帰結の一つは、1399年10月13日ウェストミンスター・ホールでの戴冠式でランカスター家ヘンリー四世が英語で即位宣誓することでやがて英語が公用語としての地位を確立していく過程と軌を一にしていく。

Ⅱ．中英語韻文ロマンスにおける多言語的要素

西村秀夫（三重大学）

本発表では次の2つのことを試みる。

(1) 最近出版された英語史の概説書・研究書における、中世期イングランドの言語状況に関する記述を検討すること。

(2) *Sir Thopas* 897-900 (Men speken of romances of pris, / Of Horn Child and of Ypotys, / Of Beves and sir Gy, / Of sir Lybeux and Pleyndamour—) に名前が挙がるロマンス類、その他チョーサーとの関連が深いと考えられている諸作品における多言語的要素を明らかにし、それをチョーサーと比較することを通じてチョーサーの英語の多言語的・多元的特徴について考察すること。

Ⅲ．『トロイラスとクリセイデ』における〈境界〉の身体化 — チョーサーの話法とポリフォニー

中尾佳行（福山大学）

〈境界〉は内と外の場所の枠を超えて諸要素が交流し、新たな意味が生じやすい場所である。この〈境界〉は、チョーサーのテキスト、言語、そしてその意味の創出に深く関わっているように思える。『トロイラスとクリセイデ』はその好例であろう。リアリティスペース（城塞都市ロンドン）とトロイ物語を系譜とするフィクショナルスペース、フィクショナルスペースでの垂直移動と水平移動、水平移動でのスペースの多様化、つまり、包囲されたトロイの町、そのトロイの中の家、その家の内と外を繋ぐ窓、寝室、ベッド等。このように〈境界〉の重要性は、既に Holley(1990), Brown(2007), Woods(2008) などにより指摘されているが、それがチョーサーの対話・語りの話法をどのように方向付けているかは、未だ再考の余地があるように思える。経験者の視点と全体を見通した視点の交流は、言語に微妙な解釈の層を生み出している。話法の問題は認知や意識に密接に関係することから、Leech and Short(1981), Fludernik(1993), Langacker(2000) 等を援用しながら考察していく。

Ⅳ. 「船乗りの話」に見られる商人像のチャーサーと読者にとっての重要性

工藤義信（金沢学院大学）

中世後期イングランドにおける多文化共生の問題を考えると、社会集団の多様化はひとつの大きな要素であり、とりわけ都市商人層の台頭とその文学的表象は、避けて通ることのできない問題である。本発表では、「船乗りの話」がファブリオーの文学伝統の上に成立していることを踏まえ、商人の詳細な描写が、いかにファブリオーに対する当時の読者の「期待の地平」を超えたものとなっているかを論ずる。「船乗りの話」の独自な点として、主要な筋と直接関わりのない描写があることを指摘する。それらの描写が、中世後期に形成されていた商業的倫理と、都市中間層の間で読まれていた道徳指南文学の文脈に照らしてみたとき、どのような商人観を映し出しているといえるかを論ずる。このような商人像をチャーサーが描いたことにどのような意義があるか、また、チャーサーの最初の聞き手たちにとってどのような意味を持ちえたかについて考察する。

10:00-11:30 研究発表Ⅲ（100周年記念会館2階第4, 5会議室）

10:00-10:40 司会 高橋勇（慶應義塾大学）

7. 中世主義者 W. G. Collingwood の中世カンブリア再建小説の言語学的再分析

伊藤盡（信州大学）

Townend 2007, 2009 による精緻な紹介があったものの、W. G. Collingwood の中世主義者としての価値は、一部の中世主義研究者（Wawn 2000）を除き、中世英語英文学研究者に広く認められたと言うにはほど遠い。しかし Ellwood 1895 のカンブリア方言と古アイスランド語の類似に基づく語彙集に向けた学術的な批判を見る時、彼の著作となる歴史小説も、William Morris に続く単なるサガ翻訳者あるいはアイスランド巡礼者の作品ではなく、中世研究者の業績として見直す必要がある。本発表では、Townend 2007, 2009 の紹介を引き継ぎつつ、Townend 2002 が提唱したイングランド内の古英語・古北欧語間の言語学的関係性に基づき、中世カンブリアを舞台にした小説 *Thorstein of the Mere* (1895, 2nd ed. 1909, 3rd ed. 1929) と *The Bondswoman* (1896, 2nd ed. as *The Bondswomen*, 1932) に見られる dialecticism を検証することで、中世

から近世以降に至るカンブリア方言の成立，継承と変遷を概観する。

10:50-11:30 司会 寺澤盾（東京大学）

8. 中英語脚韻詩における定型表現—頭韻詩との比較から

守屋靖代（国際基督教大学）

中英語頭韻詩には特定の語の組み合わせが定型表現のように現れる。この発表では頭韻詩の分析から明らかになった定型表現のひとつである“as the book tells”という言い回しが同時代の脚韻詩にも使用されているかを検証する。定型と思われる表現が散見される4つの脚韻詩，*Confessio Amantis*，*Cursor Mundi*，*The Pricke of Conscience*，*The Early South-English Legendary*を取り上げ，繰り返し使われる特定の語の組み合わせとその変種を分析する。その結果，頭韻詩人と同様脚韻詩人も，その語るナラティブが個人の創作によるものではなく，典拠となるオーソリティに拠っていると自ら語ることで語りの信憑性を増強しようとしたことが分かる。このような語りの手法の機能を narrative report of speech acts と定義し，さらには脚韻詩ならではの制約やペアとなる語の特徴について考察する。

アーサー王伝説 — 19世紀初期物語集成—

全7巻＋別冊日本語解説 監修・解説◆不破有理（慶應義塾大学教授）

The Morte Darthur: A Collection of Early-Nineteenth-Century Editions

2016年12月刊行予定 / B6判 & B5判 / 総約3,250頁

本体セット予価 ¥168,000-（＋税） ISBN 978-4-902454-41-3

● 19世紀初頭に英国で出版され、ロマン派時代からヴィクトリア朝期の中世主義の流れを決定づけた、『アーサー王の死』の3種の版を復刻。

● 監修者による詳細な書誌解題（英文&和文）付き。

第1-2巻：（約1,010頁）[1816年ポケット版①] ＊原本を約140％拡大B6判にて復刻。

THE HISTORY OF THE RENOWNED PRINCE ARTHUR, KING OF BRITAIN;..., LONDON:

Printed for Walker and Edwards... 1816.

第3-5巻：（約1,200頁）[1816年ポケット版②] ＊原本を約140％拡大B6判にて復刻。

LA MORT D'ARTHUR. ..., London. Printed & Published by R. Wilks, 1816.

第6-7巻：（約995頁）[1817年大型版]（原寸B5判変形）

THE BYRTH, LYF, AND ACTES OF KYNG ARTHUR; ..., LONDON: Printed from Caxton's Edition, 1485, FOR LONGMAN, ... 1817.

Eureka Press c/o Edition Synapse 〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-5

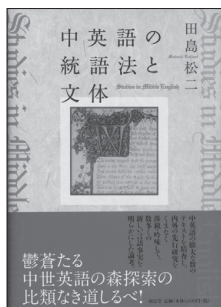
Tel: 03(5296)9186 Fax: 03(3252)1822 <http://www.aplink.co.jp/synapse> 【カタログ呈】

鬱蒼たる中世英語の森探索の比類なき道しるべ！

中英語の統語法と文体

田島 松二著

● A5判 296頁 ● 定価（本体4,600円＋税） ● ISBN 978-4-523-30076-2



英語史研究者として国際的に評価の高い著者の多年にわたる中英語研究の成果。中英語の膨大な数のテキストを精査し、内外の先行研究をくまなく渉猟・吟味して、多くの新しい言語事実を明らかにした論考！

I 中英語テキストの本文解釈

II 中英語の統語法

III 中英語頭韻詩の言語・文体

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361

南雲堂

TEL : 03-3268-2311 / FAX : 03-3269-2486

E-mail : nanundo@post.email.ne.jp

TannerRitchie Publishing

TannerRitchie
ATTORNEYS AT LAW



毎年さらに数千もの文書が追加され、拡充し続けています。

FTE	-2,499	2,500-14,999	15,000-29,999	30,000-
概算価格(税抜)	¥1,546,084	¥2,922,171	¥4,074,577	¥5,720,871

日本總代理店

(M) MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 洋書センター
〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10 Email: academicinfo@maruzen.co.jp
TEL.03-3357-1415 FAX.03-3356-8730 <http://yushodo.maruzen.co.jp>

